



ピクタインダカン

(おきみがりにぼし)

第8号

発行日 2017年2月1日

発行人 矢代 しず

秋田市御野塩7-1-29-305

白

広い田んぼを白が埋めている

刷毛で白粉を塗ったような

羽二重の白

静寂は一月の時を生きている

ふいに

時の波を滑り白鳥が舞いおりる

白生地のを糸をたぐりよせるように

冬の餌をついばむ白鳥

音もなく 雪が無心にふってくる

白鳥はながい翼をひらめかせ

うつくしさを競う

静寂の底まで白にうずまり

白鳥の輪がほどけはじめる

いちわ また いちわ……

裸木

校舎の屋根を越える

一本の樺のわたし

晩秋

ひろがる枝には

サビ色の葉が あまたしがみついている

何十年も わたしは

スケッチする生徒たちを見てきた

周りに集まり

枝を見上げ

手を触れる

何を見つけたのだろうか

きのうは

美術室で

部員がデッサンをしていた

モデルは女子部員

裸婦の素なる美しさを

みずから手もとに引きよせ

写しとつていた

見ているのは

裸ではなく

生のフォルム！

魂のかたち

わたしも

もうじき裸になる

いのちをつなぐため

一枚いちまい

枯れた葉の手を離す

みずから生きるフォルム

になる

そして

新しい絵

がうまれる

星の嫁入り

八月十一日 夕ぐれ

燧ヶ岳^{*1}は翼をひろげた巨大な鳥になり
黒くふとい影を引いている

標高一六六五メートルの

尾瀬沼のほとり

闇がブナ林から湿原へとつづく木道に降り

あたりは

カーボン・ブラックのつめたい夜

夜半

ぼくは風の小径に立つ

懐中電灯を消して

木立のようにまっすぐ空を仰ぐ

月が沈んだあとの空は

きらめきのミッドナイト・ブルー

三年ぶりに

あなたに逢える！

ペルセウス座が火を咲かせる
黄^{こがね}金色の矢が走る

突然

カシオペヤ座の肩をかすめ

ぼくに向かって飛んでくる

あなた

ぼくは急いで願いごとを唱え

しっかりとあなたの手をつかむ

ふたりのひそやかな夏の夜

星の嫁入り^{*2}!!

*1 福島県の山

東北地方最高峰（二三五六メートル）

*2 流星の和名

茄子の花ずし

スーパ―の漬け物売り場で

茄子の花ずしを見かける

色鮮やかなできばえに

目をうばわれた

白い清らかな皿に

花ずしを並べる

瑠璃色の茄子の上に

今し方まで

匂に燃え上がっていたような

黄色い菊の花

その中央には

鷹のつめの赤い花飾り

ひと口かじると

浸みとおる味が

こころに流れこみ

甘塩っぱい

母の色がこみ上げる

とぎされた小屋の片隅で

ゆるやかに成熟をまっていた

母の花ずし

「どただ色になったべな」

花火のような大輪の菊の花が

桶のなかで

母の声に 目覚める

新前のわたしも

ことばに

塩・糶こくろ・砂糖をまぶし

茄子の花ずしのように

発酵をまつ

「どただ詩が……」

キンキン

目隠しされたまま

わたしはお膳の皿で

恰好のいいしつぽをはね上げる

海苔で目隠しされ

なにもみえない瞳は

静かに流れてくる

声の温もりをかんじている

しみじみと語りあっているヒトヒト

どうやら婆さんの法事らしい

末期の様子やありし日の思い出

面影は止めどなく――

このキンキン珍しいな 目隠ししてる――

仏事でもいいんだが？

んだ 目隠しすればええど

料理すぎな婆さんも喜んでるべな

酒が座に浸みこむ

病気もかけがえのない響きとなる

オレが一番の病気もちだ

大酒呑みがいたって元気だな

来年も元気で会おうべな

キンキン冥利に――

わたしはお膳の皿で

格好いい骨になる

心水 (kokoromizu)

——「夕暮れ」(菅原正画)によせて——

わたしは水です*

聴こえてくる

水の声

あわい珊瑚色の夕暮れ

岸辺に立つ

わたしの

うすい波の布に

昏く

川向こうの樹木の影は

水面にはりつけられて

すべての音が

水のなかに吸い込まれている

さびしげな影を落とす

女性おんながひとり

わたしは

影を引きよせ

透明な光の波で

洗おう

わたしの輪郭が

さざ波にふるえる

水鏡には

心のなかにたたみ込まれた悲しみ

きよの重さを抱えたわたし

が映っている

水の心

の

おもてを

軽くなったわたしの
くつきりした貌が
流れていく

*井上ひさし著『水の手紙 群読のために』より



黒

目の前に

黒い絵がある

男たちが

ぎゅうぎゅう詰めの檻にいれられている

狭い空間には

恐怖

と

悲しみ

が降りつもっている

頬が痩け

おちくぼんだ眼窩には

無力な男たちの

拒絶できない悲運が沈んでいる

背後には

漆黒の闇がうねり上がっている

忌まわしい夢をみると

決まって囚人は凶暴になる

看守がどんなにねじ伏せても

わめきつづける

牢から魂へと声が聴こえ

わたしは黒い巨大な翳に呑みこまれる

「北へ西へ」^{*i}

どこへ向かっているのだろう

貨車の小さな窓にむらがり

鉄格子のむこうにみえたのは

メスで切り裂かれた明日の底

檻のなか

鉛色の煙を吐きだす軀

おびえる瞳には

澱が沈んだまま

不気味な沈黙が

夜を眠らせない

貨車は男たちを引きずるように

北へ

西へ

細い光の糸よ

柵しがらみをとかせ

塞がれた地衣類の心よ

詩えうた

その先になにが待っているのか

行き先も知らない男たち

うちひしがれた心は

薄墨色のペールを被っている

風も

空も

冷たく震え

時間を刻むことを忘れ

凍った貌で立ちつくしている

帰国後

極寒のシベリヤを生きのびた

ひとりの画家は

虜囚こせうの魂を描きつづけた

シベリヤを描きながら

私はもう一度シベリヤを体験している*2

*1 山口県立美術館編集・発行

「香月泰男―シベリア・シリーズ―」より

*2 香月泰男のことば

白鳥

田んぼを白が埋めている
凜として

潔い

初冬の光景

広い田んぼのまん中に
たくさん白鳥がいる
白鳥と雪は
一枚の布
のようにつながっている

突然

白鳥が甲高い声で叫びたてる
大きな声の波動で
冬天の扉がひらかれる
つめたく
透きとおった風が

もの言わぬ雪を
空にさらっていく

つぎつぎと飛び立った

白鳥

の消えた銀白色の空から

こぼれ落ちてくる

忘れられた記憶



徒然のエチュード VI

1

絵手紙に

コスモスを描く

下手すぎて

コスモス！

2

女には

壁がある

あなたの後ろには

角がある

3

男湯

女湯

暖簾からただよう

性の匂い

4

咲くまで色がわからない！

ダリアの名前

「浮気心」

5

ことばの痛み

を感じた日

そつと手渡された

山の本

山ではとらわれるものはなにもない

山の感性がよび起こされ

精神が軽くなる

山は解毒する

